

校長通信

(教職員版) 第61号 2018. 12. 10

生徒が思考する授業、 どこまでできていますか？続

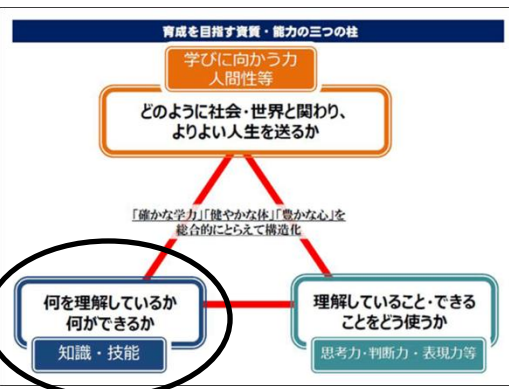
【1】はじめに

今回は、数学の授業を題材に「思考する（させる）」授業について述べました。今回は、私の専門外である他の教科について述べてみたいと思います。先生方の授業を見学していると、プリントを使用して授業をされている方が多くおられます。そのプリントには、（ ）が書かれており、いわゆる「穴埋め方式」になっていることが多いです（つまり、「記述方式」ではないという事です）。このことについて、改善が必要だと言いたいわけではありません。結論から言うと

「その段階（穴埋め方式）で留まってい
て、生徒は思考していますか？」

という問題提起をしたいと考えています。この穴埋め方式は、「育成をめざす3つの資質・能力」で言えば、「知識・技能の習得」に当たります。図の○で囲んだ部分です。今まではこれで良かったのですが、これからは、「そうは行かない」ことは何回も伝えてきました。

そこで、今回は、「『穴埋め方式』の向こう側にある授業」をイメージしてもらうために、イギリスの歴史教科書を取り



上げて、考えてみたいと思います。このイギリスの歴史教科書は、中学生を対象にしたものですが、本の帯には、次のように書かれています。

**世界との向き合い方がわかるイギリスの中学生「必須」の教科書！批判的に吟味し、自分の頭で考えるために。
「超したたか勉強術」(朝日新書)にて
佐藤優氏大絶賛！！**

もしよければ、先生方も読んでみてください。この「世界の教科書」シリーズの中では、比較的廉価で2400円です。全然日本の歴史の教科書と違いますから。

【2】イギリスの歴史[帝国の衝撃]一目次

まず、目次を紹介しましょう。

	章	章のタイトル	章のサブタイトル
	序章	物語の全体像をつかむ	本書が何を描こうとしているのかを概観して起きましょう。
初期の帝国	第1章	ロアノーク：イングランド人は初めて建設した植民地でどんな過ちを犯したのか？	なぜ植民地の建設に失敗したのかを自分で考えて見ましょう！
	第2章	「いつの間にか支配者になった者たち？」：イギリス人はいかにインドを支配するようになったか？	答えをみつけるために東インド会社貿易ゲームをしてみましょ！
	第3章	帝国の建設者：ウォルフとクライヴについてどう考え	「帝国の英雄」についてあなたが評価を下して

		るか？	ください！
	第4章	帝国と奴隷制：イギリスによる奴隷貿易の歴史をいかに語るか？	史料を用いて奴隷貿易に関するふたつの見解を論じてください！
	復習1	続べよ、ブリタニア	帝国200年の歴史を要約し、地図の記号と照らし合わせてください！
世界帝国	第5章	囚人植民地：どうすれば良い歴史映画を撮れるのか？	あなた自身の映画を構想してみましょう！
	第6章	隠された歴史：歴史に埋もれた物語は英領インドについて何を語るか？	インドにおいて人びとの関係がどのように変化したのかを示すグラフを描いてください！
	第7章	アフリカの外へ：ベナンの頭像はいったい誰が所有すべきか？	ブロンズの頭像の歴史をたどり、今日誰がこれを所有すべきかを考えてみましょう！
	第8章	帝国のイメージ：大英帝国はどのように描かれたのか？	子どもたちが大英帝国にどんな思いを抱くように期待されていたのかを理解するために、図像の読解に挑戦してみましょう！
	復習2	希望と栄光の国：帝国の次なる120年の歴史を要約し、地図の記号と照らし合わせてください！	
帝国の終焉	第9章	アイルランド：なぜ人びとはアイルランドと大英帝国について異なる歴史を語るのか？	視聴者参加型のラジオ番組で自分の意見を述べる準備をしましょう！
	第10章	切なる希望：ガートルードがアラブ人に抱いた夢を助け、そして妨げたのは何だったのか？	でたらめに書かれたインターネット百科事典の質を向上させてください！
	第11章	帝国の終焉：なぜイギリスは1947年にインドから撤退したのか？	マウントバッテン卿に宛ててインド独立を認めるように説得する手紙を書いてみましょう！
	第12章	帝国の帰郷：歴史に埋もれたコモンウェルス移民の物語をいかに掘り起こすか？	コモンウェルス移民にインタビューするために良質な質問事項を考えてください！
	終章	あなたは英帝国の歴史をどう見るか？	著者の考えに反論し、自分自身にも問い返してみましょう！

以上が、目次です。

右のサブタイトルはその章のアクティビティーについて書かれています。かなり、日本の歴史の教科書とは違うということは感じられると思います。そこで、この違いを理解してもらうために、もう少し内容を見てもらいましょう。

【3】各章に設けられた課題と生徒を思考させるアクティビティー

各章には、最初に「本章の課題」、そして最後に「最後のアクティビティー」が掲載されています。「最後の」ということですから、各章の各項目の後にもアクティビティーがあります。大英帝国の歴史に詳しくない先生にも理解しやすい章の「課題」とアクティビティーを紹介しましょう

(1) 第2章「いつの間にか支配者になった者たち?」：イギリス人はいかにインドを支配するようになったか?

この第2章の課題には次のように書かれています。

ここでの課題は、こうしてスタートに出遅れた東インド会社が、どのように、そしてなぜ、インドの広大な部分を実質的に統治する支配者となったのかを調べることです。(当時の)東インド会社がそうであったように、イギリス人の歴史家の多くは(今日まで)、イギリス人が最終的にインドを支配するようになったのは、多かれ少なかれ偶然の結果であったと主張しています。あなたはどのように考えますか。イギリス人はたんに「いつの間にか支配者になった者たち」だったのでしょうか。それともかれらは、自分たちの行為をきちんと理解していたのでしょうか。

この「課題」の内容を見ればお分かりと思いますが、この「本章の課題」は、この章の学ぶ目的＝「本質的な問い」を投げかけています。以前にも紹介したと思いますが、「主体的で対話的で、深い学び」は、もともと「主体的で対話的」学習と「深い学び」の学習の二つの潮流からできています。この「深い学び」に必ず必要なのが、「本質的な問い」とそれに対応する「永続的理解」なのです。「何を学ぶのか?」「なぜ学ぶのか?」がこの問いにあたります。例えば、この時代のことを日本の世界史の教科書はどのように書いているか。山川出版の教科書世界史B第12章「アジア諸地域の動揺」を例に取り上げます。そこには、各項目として

1 オスマン帝国支配の動揺と西アジア地域の変容

2 南アジア・東南アジアの植民地化

3 東アジアの激動

ということが書かれています。章の最初には、この第12章の概略が書かれてありますが、「何を学ぶのか?」「なぜ学ぶのか?」という「本質的な問い」の部分は見当たりません。

次にアクティビティーを紹介しましょう。

アクティビティー

このあとすぐに東インド会社貿易ゲームをしてもらいます。最初に知っておいてもらいたいルールがいくつかあります。

それぞれのプレイヤーは東インド会社のエージェントの役をします。ときは1740年。あなたはインド南部を通過して、いつもの商品を手に入れるために8週間の航海に出発するところです。

あなたがイングランドに戻って来たとき（つまりこのゲームを終了したとき）、ロンドンにいる東インド会社の役員に対して報告書を書かなくてはなりません。あなたは役員たちにつきのような事柄を報告しなければなりません。

◆どんな種類の商品を手に入れようとしていたのか。

◆どんなことが貿易の手助けになったか（たとえば、商品を手に入れるのを容易にしたゲーム中の出来事について）。

◆どんなことが貿易を妨害することになったか（たとえば、商品を手に入れるのを困難にしたゲーム中の出来事などについて）。

◆なぜあなたは、会社がインドの土地をみずから統治すべきであると考えているのか。なぜインド統治貿易の助けになるのかを説明してください。しかし、そのことが同時にいくつかの問題を引き起こす可能性があることを忘れずに指摘してください。

幸運を祈ります・・・勝つためには本当に運が必要になることでしょう！

このあと、実際のゲームの遊び方が説明されています。中々おもしろいゲームです。最後に、「ゲームの後で」ということで、次のように書かれています。

ゲームを終えたら、東インド会社の役員たちに宛てた報告書に何を書き込むことができるのか、グループで話し合しましょう。そのように話し合うことで、より良い報告書が書けるようになります。

いったい何が貿易を容易にしたのでしょうか？何が貿易を困難にしたのでしょうか？これらの問いに答えるためには、あなたの航海日誌（そしてゲーム版）を使わなくてはなりません。

あなたの目的は、インドの広大な土地を東インド会社が統治するように説得することにあります。そのために納得のいく理由をできるだけ多く述べるように心がけてください。

もう一度、この章の課題に戻りましょう。この章の課題は、「イギリス人はたんに『いつの間にか支配者になった者たち』だったのでしょうか。それともかれらは、自分たちの行為をきちんと理解していたのでしょうか。」という内容です。このアクティビティーをすることで、この課題について考えることができるようになっていきます。

もう一つの章を紹介しましょう。

(2) アイルランド：なぜ人びとはアイルランドと大英帝国について異なる歴史を語るのか？

この章は、現在でも2国間の問題として、度々ニュースに登場する英国とアイルランドの問題を取り上げた章です。この章の課題は、次の通りです。

あなたがいったい何者であるかを決定づける最大の要素のひとつは、受け継がれてきた文化的遺産、すなわちあなたの歴史にあります。しかし、異なる人びとが異なる観点から同じ出来事を見たときに、はたして歴史は同じものであり続けるのでしょうか？

アイルランドは数世紀ものあいだ、大英帝国の一部をなしていました。しかし、イギリス統治は現代に至るアイルランド分裂の原因になりました。ここでは、アイルランドの歴史にとって重要な出来事のいくつかを取り上げて、双方の側がいったい何を言わんとしていたのかを考えてみましょう。最後には、視聴者参加型のラジオ番組に参加し、歴史について自分の意見を述べる準備をすることができます。

この課題のあと、早速アクティビティーがあります。二人の人物、イアンとパトリックが登場します。

わたしの名はイアンです。わたしはユニオニストです。わたしは自分がイギリスの一員であると感じ、アイルランドが連合王国の一部であり続けてほしいと思います。



わたしの祖父はソムムの戦いでイギリスのために戦いました。わたしは(……)と思います。わたしは、イースター蜂起は(……)であると思います。

わたしの名はパトリックです。わたしはナショナリストです。わたしは、北アイルランドがイギリスからの支配を脱すべきだと思っています。



わたしの祖父はイースター蜂起に参加しました。わたしは、それを(……)だっと思います。わたしは、イギリス軍の中で戦ったこれらのアイルランド人たちは(……)だっと思います。

吹き出しのなかの言葉を書き写してください。つぎにイアンとパトリックが何を言おうとしていたのかを考え、空白部分を埋めてください。(注：写真の人物は、私がネットで探したイアンとパトリックです)

このアイルランド問題をこのようなユニオニストとナショナリストの双方の立場で考えさせようとしているのが、この章です。この章を読んだときに思ったことは、「大英帝国の歴史を支配する立場からだけではなく、支配されていた側からも捉えようとしている」ということです。英国とアイルランドの関係をこのように客観的かつ相手の立場も理解するように教科書で教えているということに、わたしはある種の感動を覚えました。歴史も文化も違いますが、この二国間の関係を日韓関係に置き換えて考えてみたとき、果たしてこのような事ができるのかどうか。このように考えてみると、この教科書が、自国の利益一辺倒で書かれているわけではなく、「批判的に吟味し、自分の頭で考える」ということが貫かれているように思うのです。極めつけは、終章のサブタイトルが「著者の考えに反論し、自分自身にも問い返してみましよう！」ですからね。次にこの章の最後のアクティビティーを紹介しましょう。

アクティビティー

歴史：学ぶのか、忘れるのか？

2007年、アイルランド共和国の上院議員デヴィッド・ノリスは、アイルランドのラジオのインタビューに応じました。彼はアイルランドのいったいどんな部分を変えたいのかと質問をされました。かれの返答の一部に、次のような箇所があります。

「わたしは、過去のなかに生き、古い戦いに明け暮れていたいとわたしたちが相変わらず抱いている願望そのものを変えたいと思うのです」。(アイルランド共和国上院議員デヴィッド・ノリス)

もしイアンとパトリックがノリス上院議員に返答しようとして、ラジオ局に電話を入れたとしたら、彼等はどんなことを話すでしょうか？

ここでの課題を振り返り、イアンとパトリックのためにあなたが準備してきた吹き出しのなかから、いくつかのセリフを用いて考えてみましょう。

過去を忘れことなど本当にできるのでしょうか？

パトリックとイアンは、歴史を「学ぶ」ことから過去に対する考えを深めてきたといえるのでしょうか？

問題の歴史的淵源を学ばずに、アイルランドのような地域の問題を解決し得るのでしょうか？

最後に、21世紀を生きる青年として、ノリス上院議員が述べたことについてあなたはどのように考えますか？

以上、2つの章の「この章の課題」と「アクティビティー」を紹介しました。イギリスの歴史教科書が、如何に生徒を考えさせ、歴史から現代世界を生きる価値観を学ばそうとしているかが分かります。

【4】さて、どうするか？

(1) 授業で一番思考しているのは？

日本の歴史教科書とイギリスの歴史教科書の違いが分かったところで、「さて、明日の授業からどうしよう？」という問題が残ります。日本には学習指導要領があり、大学入試があります。指導要領を踏まえた授業を行わなければなりませんし、大学入試にも対応しなければなりません。

授業見学をしていて一番思うことがあります。50分の授業の中で一番「思考をしている」のが誰かということ、それは先生なのです。なぜか？先生は、講義をして、言葉を発し、アウトプットしているからです。きちんと『ストーリー』として話をしています。わたしは、この

「『ストーリー』として理解しているか？」

がとても大事だと思っています。これは、歴史の授業だけでなく、あらゆる授業で言える事だと思います。特に、読解力や鑑賞力などが求められる授業では、習った知識を下に、その単元を「ストーリーとしてアウトプットできるか？」が大事なのではないのでしょうか？そこで、提案です。

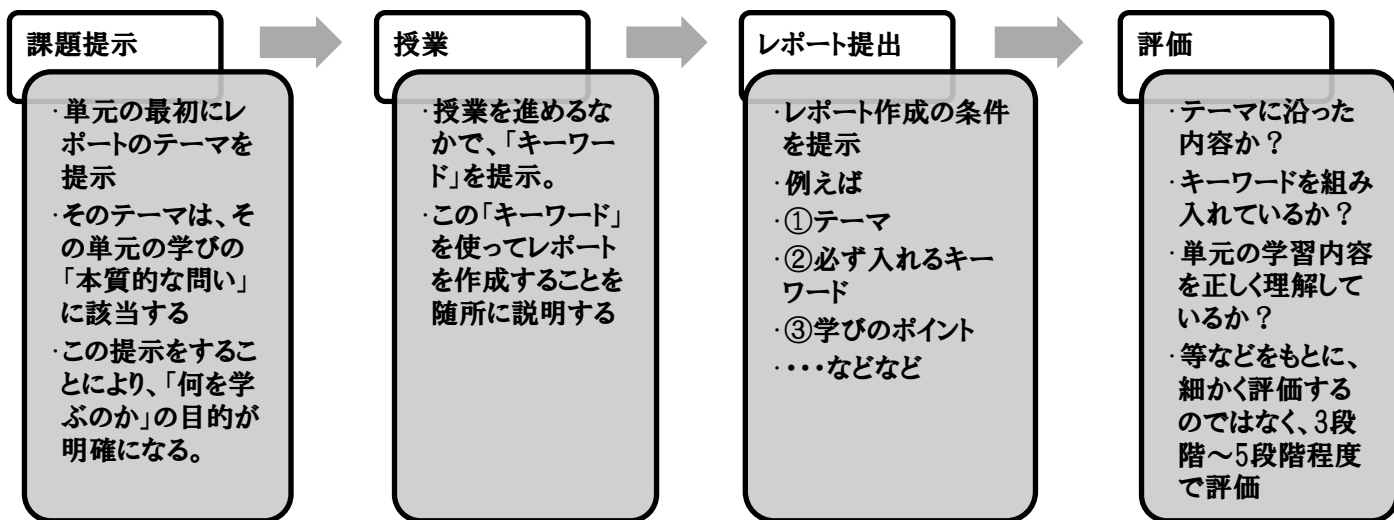
「穴埋め式プリントを提出させるかどうかはお任せしますが、

単元や章の修了段階で、レポート提出させませんか？」

これから求められるのは、知識・技能を踏まえた思考力・表現力・判断力です。求められる力は、直ぐに忘れてしまう断片的な知識ではなく、本質的で総合的な理解力です。この力をつけさせるには、「記述させる」「話させる」等のことを行うのが良いと思います。「話す」（プレゼンする、口頭試問をする）等の時間があれば良いですが、そんな時間が無いのは百も承知です。それでは、「記述させる」という方法で、この本質的で総合的な理解力を育てませんか？

(2) レポート課題をどのように行うか？

それでは、レポートの課題をどのように行うかの試案を提示したいと思います。



量的には、B5用紙の2/3程度からスタートすれば良いのではないのでしょうか？最低800字以上または1200字以上ぐらいですかね。因みに大学院でレポートを60本以上書きかましたが、書く量を短く設定される方が難しいです。

このような取り組みをすることで、生徒は、「穴埋め方式」による断片的な知識だけを習得し、テスト前に必死にプリントの内容を覚え、テストが終れば頭から知識が消えていくということが、改善されるように思うのですが、如何でしょうか？とにかく、テスト前からテスト期間中、登校してくる生徒の姿は、「必死に覚えている」のです。知識を身につけるのは、当たり前、それを使って如何に思考するかということが問われているのに、「そんなことで良いのかな・・・」といつも校門で思っています。

(3) 先生方の懸念

こんなレポート指導を提案すると、先生方はすぐに「他人のものを写して提出する生徒が出てくる」と心配するでしょうね。でも、考えてみたら、今でも穴埋め式プリントを、何も考えず友達のプリントを借りて写して提出する生徒は結構いるのではないですか？そんなことに時間を費やしていると、知識のINPUTにもなりません。

他人のものを写したレポートなんて、読めば直ぐに分かります。ネットの情報をコピーしてもすぐにわかります。そんなことを懸念して、「思考させない」ほうが生徒の学びの損失は大きいと思います。

イギリスの教科書のように、素晴らしいアクティビティーが編み出せるに越したことはありません。しかし、中々それもハードルが高いように思います。それならば、まずは「本質的な問い」に対して、キーワードを使って（＝知識のINPUT）、思考させることで、総合的な理解を促進するレポート作成をしてはどうでしょう？

＝付録＝ ポートフォリオ学習会についてーわたしの振り返り

この原稿を書いている間に12月7日のポートフォリオ勉強会がありました。今回の勉強会には、30数名の先生方が参加しました。この手の勉強会としては、かなり多いほうだと思います。（参加されなかった先生、学びの機会を逸しましたね。それとも、すでに既知のことでしたか？）

勝田先生が、最後にお願ひした勉強会の振り返りは、勝田先生から情報提供していただけるので、先生方に情報を提供し、学びのシェアをしていただければと思っています。

先生方の授業の見学をしていて気づくことがあります。勝田先生が東百舌鳥高校で取り組んでいるような

めあて⇒教授⇒振り返り

をされている先生は、布施高校では少ないということですが、教頭は口が酸っぱくなるくらい、「授業の最初に今日の目的を言ってください」と伝えていると思いますが、中々ですね。私が思うには、なぜ先生方が最初の「めあて」ができないかというと、先生方自身が「今日の授業のめあて」が漠然としか把握されていないからだだと思います。「なんとなく、前回の続き・・・」というように授業に入っていくと、「なんとなく、時間が来るまで授業をして終了する」という流れの授業が多いように思います。このような授業で「振り返り」をさせても、生徒は十分な振り返りはできません。なぜか？「何を学ぶのか」の目標が曖昧なので、「何を振り返ればいいのか」が分からないのです。

またまた数学の話で悪いですが、演習をするときでも、「この前は〇〇番までやったから、今度は◆◆番から・・・」という授業の入り方をしている風景をよくみます。でも、演習の授業でも、「この演習問題で何を学ばせ、何を身につけさせるのか」という目標を持っていたら、「めあて」はできますよね。

今回の勝田先生の情報の授業の実践では、振り返りを活用した生徒の学びが示されたと思います。こんな言い方は失礼と思ひながらあえて言いますが、「東百舌鳥でこの学びができるのだ・・・。果たして布施の生徒は、こんな学びができていのだろうか？布施でこの学び方をしたら、生徒はもっと伸びるのではないか・・・」と思いました。なぜ、そんなことを言うかということ、授業の最初に先生が「前の授業は何やったかな？」と投げかけても、生徒からは余り返事が返ってきません。返ってきても、断片的な単語です。それは、断片的な知識でしか頭の中に残っていないからです。きちんと振り返りをさせることで、「ストーリー」として授業の内容が残っていくのではないのでしょうか？

先生方には、「そんなこと言っても授業は50分しかなくて、めあてはやっても振り返りに使う時間なんて無いですよ。教えることがたくさんありすぎて・・・」と思う先生もたくさんおられるでしょうね。でも、本当に授業ですべてのことを教えられるでしょうか？少し発想を変えてはどうでしょう。勝田先生の授業の実践で、「自ら学ぼう」としている生徒の姿が見えてきましたよね。当然、必要な知識・技能は教えなければなりません。しかし、「自ら学ぼう」という主体性を育てるのも大事なのではないのでしょうか。

私が市岡高校で、大阪の公立高校で初めて産業能率大学の小林先生を呼んで研修をしたとき、小林先生は、自身が高校の物理で実践していたアクティブラーニングの成果を次のように語っていました。

「ALをやり始めると、放課後に物理の部屋で生徒が勝手に勉強し出すのですよ」

これが、ALの威力ではないかと思ひます。先生方の発想の中に、「俺が（私が）、生徒に教えてやらなければならない」という強い思いがあって、そのこと自体は間違いではないと思ひますが、その一方で「『自ら主体的に学ぶ学習者』をどう育てるか？」ということも、21世紀教育の中では重要だと思ひます。

前回の校長通信で登場したリクルートの乾氏とのやり取りで、こんなことがありました。以下メールからの引用です。

「この資料を作っているあいだ、資料の「続き」が頭から離れませんでした。それは、このまま、学び続ける／学びから離れる、というこの二極化が進行していった場合の、「貧富の差」と重なり合ってしまうのではないかと、というBadシナリオです。富裕層の親が、自分も学んでいる一方で子育てへのコミットも大きく、小さなころから受験勉強にとどまらず、海外経験や文化・芸術的な取り組みなど多彩な経験をしていった結果、学習の有効性をしっかりと感じる社会人となっていく、でも逆の場合は・・・」

きっと、上野先生をはじめ、池上先生や昨日おいでになっていた先生方、学生さんたちこそが、このシナリオを覆す希望の光だと感じます。学校現場に丸投げすることなく、自分自身も主体的に取り組んでいきたいと思ひます。」

「ポートフォリオに取り組んで、学び続ける若者を育てませんか？」それがわたしの振り返りです。